

結局、1899年から1924年までの約四半世紀にわたる洪元煌と渥美の師弟の情誼は、過去の美談になり、洪元煌が渥美校長に贈った漢詩で言及した「有時得共聽流泉（時間があればともに泉の流れる音を聞く）」の約束も雲や煙の如く消えていった。

結論

以上、本稿は植民地政策と地域社会の二つの側面から、1920年代を中心に、官製青年団制度が台湾に導入された主な要因を検討するとともに、草屯炎峰青年会という地域の自主性に基づく青年団体が植民地統治と非官製の自主的青年団体に対して、どのように綿密に力を発揮・維持し、葉榮鐘のいう台湾政治社会運動において「最も有力な精鋭部隊」になったのかを分析した。

これまでの論述を総括すると、以下の結論が導かれる。第一に、かつての学校「青年」は1920年代に「台湾青年」に一転して変貌し、台湾政治改革の旗を掲げ、植民地社会の大多数の青年学生の手を支持を獲得した。植民地政府はこれに対して、1926年に文教局を設立し、青年団指導者を積極的に養成し、さらに大日本連合青年団と共同で、地方社会教育に関わる職員と公学校の訓導を対象とする第2次全島青年団指導者講習会を開催した。伊沢修二以来の学校「青年」に片寄った政策から、文教局の設立を機に、学校教育と社会教育・教化との関連を強化し、1930年に台湾青年団訓令を公布し、学校外青年層の思想教化を官製青年団に統一して統制を図った。その後、この青年団制度は徴兵制施行の養成機関に変わっていった。⁶⁰

しかし注意しておかなければならないのは、1920年代の文教局の設立と官製青年団の導入、ないし当時の台湾社会と世界情勢の変化は密接に関連しており、特に1921年以降の台湾文化協会が台湾社会と青年層に与えた影響は看過しえない。

第二に、本稿が論じた草屯炎峰青年会の成立過程は官製青年団に類似しているが、その属性は大きく異なっている。炎峰青年会は、伝統と近代との間に位置して、伝統と地域の人的ネットワークを通して維持・連結していた。いわゆる「近代」とは、植民地政府によって導入された植民地近代ばかりでなく、被統治者の主導によって作られる代替的な近代も存在していた。この点が炎峰青年会と官製青年団体が最も異なっていたところである。

最後に興味深いのは、地域社会における植民者と被統治者の関係は決して普遍的ではなく、身分と植民地政策の変遷によって、協同したり対立したり、あるいは両者が同時に存在したりした。1920年代における渥美寛蔵庄長と草屯炎峰青年会の四大姓の若い世代との関係（支持から対立）が、その一例である。

（原文：中国語、日本語訳：南誠・李偉）

60 宮崎聖子『植民地期台湾における青年団と地域の変容』334頁。